



医療法人近森会

発行 ● 2008年4月25日

www.chikamori.com
www.近森病院.com

びるっば 5

Vol.262

〒780-8522 高知市大川筋一丁目1-16 tel.088-822-5231 fax.088-872-3059 発行者●近森正幸/事務局●川添昇

この春、124人の新人を迎えて 病院らしい病院として在り続けるために

写真は4月1日、2日の両日、新人を迎えて開かれたオリエンテーションで、講演を行なった近森正幸理事長。背景は近森会グループのシンボルマーク。理事長はまずこのマークの解説から始めた。「自分が大学時代に車で帰郷するたび香長平野に入った瞬間、目に飛び込んできた抜けるような青空のスカイプルー。これをシンボルマークの色にした。遠くから見れば十字の形で、はためているように見えるのは、時代のニーズに柔軟に対応しようとする近森会グループの基本姿勢を示している。Fが二つ並んでいるようにも見えるが、FreedomとFlexibilityを表している。」



近森会グループ理事長
近森 正幸

機能的な病院群

高齢社会を迎え、低医療費政策が強力に進められるなか、医師の研修制度の改革により地方の医師が減少し、高知県の医療崩壊は急速に進んでいる。そんななか、この春124人も新人を迎えることができたことを嬉しく思う。近森会グループおよび外部委託を含めると、現在1,547人もの大所帯となった。新人の皆さんは、質の高いいい医療を提供できる、やる気のある有能なスタッフに育ってほしい。

近森会グループは、急性期医療を担う地域医療支援病院の近森病院338床、脳卒中や脊損の患者さんを対象とした全館回復期リハビリ病棟の近森リハビリテーション病院180床、整形外科専門のリハビリを提供する近森オルソリハビリテーション病院100床、精神科の急性期専門病院である第二分院104床と精神障害者の在宅サポートを行なう高知メンタルリハビリテーションセンターを擁している。こうした各医療施設が高知駅前であって、機能を絞り込んだ専門性の高い病院群として、互いに密接な連携をとりながらひとつの有機体のように機能し、良質で効率的な医療を提供している。近森会グループはおそらく全国でも有数の機能的な病院群ではないかと思っている。

なんのための医療か

私たちは何のために医療をしているのか。それは高齢者であっても、たとえ障害があっても、できるだけ早く治療し、自宅に帰って住みなれた地域で暮らしていただくことである。その究極の姿として、このほど春野のリハビリテーションセンターを県から民間委譲された。社会福祉法人ファミーユ高知では、2年後、新しい建物が完成すれば、身体だけでなく知的、精神障害の方々と共に、社会復帰や就労を目指すことになっている。たとえ障害

があっても、地域で仕事をして普通に暮らしていただくという、大きな夢を実現しようとしている。

これからの医療

高齢患者の増加と共に、医療の形が大きく変わろうとしている。これまでの医療は医師、看護師中心であり、人手が足りないために、患者さんは絶食にされて寝かせっきりにされ、末梢輸液で低栄養になっていた。

以前は患者の多くが若くて骨格筋が充分あったことから、2週間程度の絶食でも栄養が維持され、こうした非生理的な医療に何とか耐えることができたといえる。高齢者が増えた現在では、これからはチーム医療で人手をかけて患者さんの身体を出来るだけ動かし、可能な限り口から食べてもらい、腸を使って輸液を減らし、低栄養から生じる免疫機能の低下や感染症の繰り返しを防ぐことで、長期入院を減少させなければならない。リハビリにより廃用が予防され、治療効果も向上し、早期退院が可能となる。これに伴い労働生産性が高まって相対的に人件費率も下がり、物のコストも削減される。チーム医療によるこうしたマネジメントにより、増えた利益を人材の蓄積に再投資し、専門性の高いスタッフを増やし、良質で効率的な医療を提供することが、急性期病院として生き残る大きな方向性ではないかと考えている。

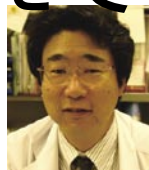
夢を追える医療

現在の医療において最も大事なことは、医師が迅速確実な根本治療をまず行なうことである。高齢患者さんの低栄養には栄養サポート、廃用にはリハビリを行ない、専門性の高い多職種がチームで対応する時代になっている。時代の変化に応じてこれからも病院を変革し、患者さんにとっていい医療を提供できる病院でありたいと願っている。新たな仲間を迎え、ともに夢を追える医療を行なっていきたい。

2008年3月21日、18年度研修医修了式

臨床研修医を迎えて

循環器科部長・研修管理委員会 委員長
川井 和哉



3月21日に18年度研修医修了式が行われました。当院の初期研修医4人が2年間の研修を終え、元気に巣立っていきました。

毎年のことですが、研修が始まったころの初々しさ、研修途中の厳しい顔、笑顔、泣き顔、そして終了間際の自信に満ちた顔を思い出し、感無量でした。

当院に残る者、母校に戻る者、新しい施設に行く者、新しいことにチャレンジする者と選んだ道は違いますが、それぞれが自分たちの未来を見つめ決めた道です。当院で培った力を元に頑張ってくれるものと信じています。



▲2008年3月21日に開かれた18年度研修医修了式で

また、4月から新しく初期研修医が3人、後期研修医が3人、仲間に加わりました。当院は急性期病院・地域医療支援病院であり、救急疾患や一般的疾患を多く経験することができます。同一疾患のバリエーションをたくさん経験することで、臨床医としての能力は飛躍的に伸びます。そして、当院の特徴である、チーム医療、コ・メディカルスタッフのフットワークの軽さと高い能力、急性期から在宅までのシームレスなケア、地域医療連携などを学ぶことは、医療人として今後の大きな財産になると思います。

当院の研修システムは、前委員長の北村龍彦先生と、プログラム責任者の浜重直久先生が、ゼロから作り上げてくれました。研修管理委員長を拝命して大変な仕事だったことがよくわかり、心からの感謝と身の引き締まる思いでいっぱいです。

まだまだ未熟ですので、プログラム責任者後任の八木健先生や各指導医たちと相談しながら活動していくつもりです。幸い、各科の部長と同年代であり、コミュニケーションも取れていますので、みんなで協力して、いい研修病院にしていきたいと思っています。

当院を卒業した研修医の、県外での活躍も耳に入ってくるようになりました。全国での活躍は当院研修の伝統を感じ、嬉しく励みになります。楽しく

有意義な研修生活になるよう、病院をあげてお手伝いしたいと思います。

ファミリーユ高知の移転



旧松田病院跡に、ファミリーユ高知本部及び障害者福祉サービスセンター・ウェブが移転しました。1階はデイケア、2階は作業所と事務所になっています。



写真は、ファミリーユ高知の近森正幸理事長出席のもと、新天地での発足式が開かれたときの模様です。

出張報告 ● 源流を求めて、米国研修の旅

米国に当たり前前に存在する治療の一環としての栄養

臨床栄養部 管理栄養士 佐藤 亮介

現在、当院のNSTにおいて行われている臨床栄養士の業務、もしくは日本における臨床栄養士の在り方の形成には、他でもない宮澤臨床栄養部長が米国から日本に持ち帰ったものが基本となっていることは周知のことである。

当院の臨床栄養部にはその栄養管理を習得するべく、全国から管理栄養士が集う。私も例にもれず、その一人であり、自身が生業としていることの原点を確かめる意味でも、米国研修への参加はかねてからの強い希望であった。

約1週間の研修で遭遇した医療のレベルの高さに驚愕したのは事実であるが、特筆すべきは、その高度な医療のなかに“治療の一環としての栄養”が当たり前前に存在し、臨床栄養士の手によって、高いクオリティで患者に提供されていたことである。

昨今、日本においてもNSTは定着しつつあり、医療における栄養の重要性が謳われるようになったが、これはひ



◀EMORY 大学病院では、ER(救急センター)の段階から早々に臨床栄養士が関わることもあるという。ERの外で休憩中のスタッフと記念撮影。「EMORY 大学の構内で栄養学の原書も買いましたので、ガンバって勉強します!」と、佐藤管理栄養士(右端)

▶臨床栄養部の宮澤靖部長の留学先EMORY 大学で。左から、宮澤部長と恩師・臨床栄養士の Dr.Glen Bergman、右が筆者



とえに、前述したような環境のなか、先人が苦勞して手に入れ、スーツケースいっぱい詰め込んで持ち帰ってきた“想い”のおかげである。我々は、その“想い”を大切に育み、次の世代へと培っていかねなければならない。

源流は、強く、しなやかに、そして誇り高く流れていた。その流れを絶やすことなく、やがて広がるであろう、本流へとつなげて行きたいと考える。

第49回
地域医療講演会— 米国人医師招き
同時通訳で米国フロリダ発
医療事情あれこれ

▲ご講演中の心臓外科医 Dr. Accola

昨年、入江博之部長率いる心臓血管外科チームが米国病院研修でお世話になったフロリダホスピタルの心臓外科医 Accola 先生の、英語による（米国人ですから当たり前と云えば当たり前なのですが・笑）講演会が開かれました。これは、東京での会議に招かれ、日本に行くのならば高知にもという Accola 先生のご希望で実現しました。

フロリダホスピタルはフロリダ州中央部に 3,025 のベッドを持ち、17 の関連病院とネットワークを組む急性期医療に特化した病院機構です。さらに、13 の救急センターを持ち、年間 100 万人以上の来院患者があります。また米国の雑誌ではアメリカのベストホスピタルに 6 年連続で選ばれているという規模の大きさばかりではない、質も保証された病院なのです。

ご講演はまずご専門の心臓血管外科関連の話から始まり、弁膜症での僧帽弁形成術の優位性や、若年者でも生体弁の方が有利であることの勧めなど、比較的親しみやすい内容が選ばれていました。

通訳の方が同行され同時通訳で進行しましたが、専門用語に対してなど入江部長からは流暢な英語でしかも軽妙に内容の補足や補強が行なわれ、国際派入江部長の面目躍如といった、別の面の楽しみも味わえる会となりました。

ご講演終了後には会場からやはり英語も遣って看護体制や医療安全、その他さまざまな質問が活発に寄せられました。定員オーバーだったけれど聴衆の方々にもしっかり講演内容をご理解いただけたのではないのでしょうか。

講演後に得月楼で開かれた米国研修同窓会では、どろめやイタドリなど高知特産の品々を Accola 先生は「変わっているけどおいしい」と、たくさん召し上がられました。

本年 9 月に新しい病院が出来た後にまた研修に訪ねたいと、心外チーム一行はすでに次回を期しているとか。

50 回目の節目を目前に、地域医療講演会もこうして少しずつ国際色豊かに成長しているようです。



▲流暢な英語で、司会進行を務めた入江博之部長

◀創業明治 5 年、高知の誇る由緒正しき料亭「得月楼」で同夜開かれた米国研修親睦同窓会

81回 救急医療症例検討会 2008.4.4

近森病院 ER 診療部長
根岸正敏

司会進行は私の方で行ない、最初は喉頭異物について、まず南消防署の田中千博さんより搬送状況の説明、次に呼吸器外科の山本彰部長による経過報告。さらに頸部刺創について、南消防署の高橋力也さんから搬送状況説明、同じく山本部長より経過説明がなされました。

気道不完全閉塞時のピットフォール、頸部刺創の診断と治療、さらに気道異物全般の豊富な経験談がありました。症例に関しては 2 例ともに無事に



救命されました。

最後に、ER 竹内敦子医師より「PSLS について」と題して講演がありました。PSLS とは病院前脳卒中救護であり、t-PA という新しい薬品（血栓溶解療法）の効果を十分に引き出すための、病院前での脳卒中診断、搬送、そして搬送すべき施設の基準など詳しく説明されました。現場で活動する救急隊はもとより、医師、看護師など医療機関側にも大変興味ある内容でした。

今後、高知県でもこのガイドラインが十分に生かされ、一人でも多くの脳卒中患者さんの予後が改善されることが望まれます。

聴診器

はな便り

地域医療連携室
看護師長 和田 道子

今年もまたその季節はやってきた。梅の花がほころびかけると山々を攻撃色に変え、桜舞い散る風ふけば、最強の力で私を襲い、アジサイの花咲く頃に去っていく。

そう、あれは忘れもしない成人式を迎えた年。お祝いにと「くしゃみ・はなみず・目のかゆみ」の三点セット



が贈られてきた。以来、毎年欠かすことなく届けてくれる。二度目の成人式も過ぎたというのにいまだに続いている。かなり、律儀なしぶとい奴。初めの頃は、TVCM や、広告をみては色々試してみたが中々効いてくれない（病院にも行けよ……）。

ある時、所属部署の主任が、「子供が出来たら体質変わるかも」と。その後、めでたく子供が出来たが変わらず。主任に言う「一人じゃいかんがよ」

と。二人目も出来たけど相変わらず。すると、「同じじゃいかんがよ」三人目は違ってしたがちっとも治らない。

そのうち、旦那も仲間入り。マスクにゴーグル・ティッシュペーパー。三種の神器をかざし戦い暮れるこの季節。窓の外では、花みずぎが風に舞っている。家の中では、鼻水き・鼻拭ぶぎで舞い舞いしている。

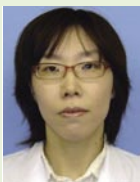
こんな私達を見た子どもが一言。「哀れよの一」。しかし、あなた達は重大なことを忘れていて、こんな二人の血が流れていることを。ならないはずがない！！（和田家「鼻便り」より）

ドクター ニューフェイス

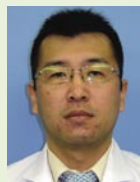
①所属②出身地③最終出身校④家族や趣味のこと、自己アピールなど示します。



濱口 卓也
はまぐち たくや①泌尿器科②和歌山県③高知大学④心機一転



小野 美樹 おのみき①精神科②岡山県③高知大学④小児科5年、精神科は今年2年目になります。転科してインコを飼い始めました。現在インコと共に成長中。でも、インコの方が言葉をたくさん覚え、負けているかと思う日々です。



宮澤 慎一 みやざわ しんいち①整形外科②広島県福山市③岡山大学大学院④サッカーは観るのもするのも大好きです。最近、子育てに奮闘中です。



谷 真規子
たに まきこ①麻酔科②広島県③九州大学④初めての高知での生活を楽しみにしております。

出逢えて嬉しい春いちばん

2008年度 近森会ニューフェイスの皆さん♥応援してください

①所属②出身地③最終出身校④家族や趣味のこと、自己アピールなどを、顔写真の左から、前からの順で掲載しています。

初期研修医



近澤 悠志 ちかさわ ゆうし

②吾川郡いの町③愛媛大学④概ねこんな価値観で生きてます!! ホームランバッター<バントの名手、衣・住<<< 飲♥♥、スノボ<スキー、チェーン店<老舗、お金<< 愛♥

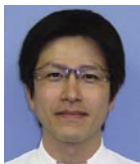
長谷川 義仁 はせがわ よしひと

②岐阜市③大阪医科大学④「力」を持ちたいと思った。今の私ではあまりに「力」不足だからだ。その「力」を得るため、私はようやく歩き始めた。

濱田 佳寿 はまだ かず

②高知市③高知大学④念願の近森病院に就職でき、期待に満ちています。知識、技術、コミュニケーション能力、お酒の強さ等、たくさんスキルアップしていきたいです。

後期研修医



井上 智雄
いのうえ ともお①整形外科②神奈川県③高知大学④昨年10月に長女が誕生し、はや5カ月。娘の成長を見守ることが一番の楽しみです。親バカぶりには自信があります。



濱 ゆき
はま ゆき

①形成外科②長野県諏訪市③高知大学④最近3度目の引っ越しをしました。初めて市の中心部に住むことになり、近所に店がたくさんあり、これからの生活が楽しみです。

乞

熱

烈

応

援

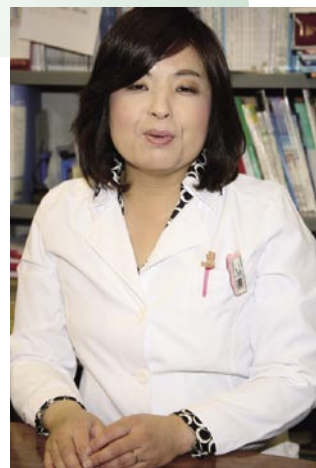
昇格の抱負です。

私のなかの戒め

このたびのお話をいただき、「肩書きばかりが大きくなって、私にどんな仕事ができるのだろうか？」という不安まじりの気持ちと、「あ～私ももうそんな年齢になってしまったんだ」という複雑な気がしました。

近森病院に赴任してまる9年が経ち、私の医師生活の約半分をここで過ごしてきたことになりました。良い意味でも悪い意味でも「慣れ」が生じてきたのは否めません。今回の部長就任に際しては、惰性に流されないようにとの戒めと受け止めてやっていきたいと思っております。

また、昨今、女性医師あるいは女子医学生が増加していますが、近森病院のような忙しい救急病院では女性医師、とくに家庭を持っているとやっていけないのではないかとといった不安も聞かれます。そういう方々に対して、私がこうして仕事をしていることで、少しでも何かの指標になればと感じています。



消化器内科部長 青野 礼

トシに見合う中身の…

部長を拝命しました。といっても諸先輩方は皆健在で回りの風景は同じですし、急に仕事が変わったわけでもありません（むしろ若いDrが減って旧来の仕事が増えそうな気配ですが…）。まああまり意識をせず（少女のことで肩に力が入らないのがいいところ？）ひとつひとつ仕事をして、若い人たちにももっと関わっていきけるよう努力したいと思います。ただ、もうそんなトシになったかと少々狼狽しています。トシに見合うだけの中身が伴っていないので、もっと本を読んだり音楽を聴いたりする時間を持って、仕事以外のことはろくに知らない状況から抜け出せるようにしたいと考えています。



循環器内科部長 窪川 渉一

お知らせ

「第51回地域医療講演会

・医療安全セミナー」

平成20年6月6日(金)18:30～
高新文化ホール

あなたは、インスリンのこと

本当に知っていますか？

～明日からあなたがアドバイザー～

第52回地域医療講演会

平成20年6月21日(土)13:00～
高知市文化プラザかるぼーと・大ホール

「聞いてみませんか？今どき、これからのメンタルリハビリテーション」

～統合失調症について～

講師 国立精神・神経センター
菊池安希子 先生

● 5月の歳時記 ●

クレマチス (キンポウゲ科、
クレマチス属の宿根草)

文 近森オルソリハ病院看護師 岡 林 篤 子

クレマチスは別名テッセンとも呼ばれ、日本人好みの端正な花容で江戸時代以降栽培されています。ただし現在栽培されているものはヨーロッパで品種改良されたものが基になっています。品種や花色も豊富で垣根やフェンス、ポール仕立てや行灯づくりなど色々な形で栽培されています。花言葉は「高潔」。

我が家の庭も色とりどりの花でにぎわっていますが、クレマチスの美しさがいっそう庭を引き立ててくれています。

画
千光士可苗

医療安全シリーズ⑬

抱え込まないで

「呉牛、月に喘ぐ」の諺にもあるように、思い過ぎて取り越し苦労が多い私を、気付いてみれば、周囲の仲間がしっかり支えてくれていた。何と贅沢な身分。

4月に新入職員を迎え、堂々とした今どきの若者を前に「医療安全の取り組み」のプレゼンを終えた今からが今年の勝負。今年こそ、と長い間トライ＆エラーで抱えてきた課題にいま、火種が点こうとしている。

まずは、戦略会議がスタートを切った。

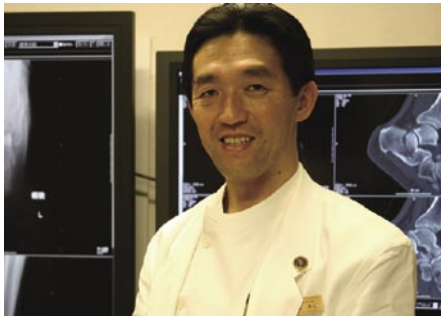
「抱え込まず、建設的にシステマティックに」がテーマである。時に怒り、時に涙しながらも、物言える関係性のなかで成長させていただきたいと考えている。そしてもう一つ。いま、私の机の前には「仁美ちゃん」の背中がある。仁美ちゃんは、診療情報管理室に今春配属されたピカピカの1年生。何やかやと、医療安全委員会の仕事を手助けしてくれる嬉しい仲間が増えた。とっても嬉しい。(医療安全担当看護師長 青木千利)



乞 熱 烈 応 援

昇格の抱負です。

当科をグローバルに



整形外科統括部長 衣笠 清人

整形外科統括部長を拝命いたしました。と申しましても現実には呼び名が変わっただけで日々の業務内容が変わ

るわけではございません。ただ統括という言葉を広辞苑で引きますと「別々になっているものをまとめてくくこと。統べくくすること」とあります。

したがって、今後は医員の数も増えていく中で、いろいろなパーソナリティの人たちの集合体を円滑に機能させる役目に重点を置くように、という意味合いもあるのかなという風に理解しております。ともあれ私の第1の目標は今までと同じで、年間2000例以上の手術数を達成することであり、さらに今年は当科をグローバルに発展させることであります。そのためにスタッフや若い人たちとさらに一層力を合わせ、これからも努力していきたいと思っております。関係各所の皆様、今後とも整形外科診療へのご援助ご協力のほど卒卒よろしくお願ひ申し上げます。

帰ってきた厚かましい新人



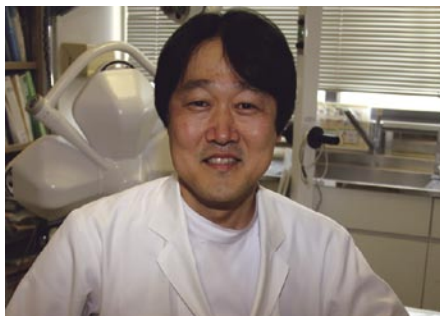
整形外科科長 上田 英輝

4年ぶりに帰ってきました。

2001年から3年間、この近森病院で外傷治療を中心に充実した日々を送っていましたが、その後、東京で関節疾患の勉強を1年、そして高知に帰ってから3年間大学で慢性疾患やスポーツ傷害、さらには病棟医長を務め、病院としてのマネージメントに携わるなど、外傷以外の分野も幅広く見渡す経験をしたことで整形外科医として少し成長できたように思っています。ただその中でも外傷治療への思いは消えることなくかえって増す一方でした。

いま4年ぶりにこの現場に戻ってきて、前にも増してスタッフの皆さんの熱気を肌身にジンジン感じているところです。ただその熱気に負けまいとして指示を出していると、古いやり方だったりして冷ややかな目で見られることが多々ありますが、まだまだ「新人」ですので温かく見守ってやっていただけませんか。そのうち「使えるヤツ」になりますから。

敷居が低い？



外科部長 八木 健

東京で生まれて群馬大学に入学し、医者になって群馬・埼玉・東京・高知の病院に勤務して、そこでそれぞれ何年間か生活しました。今回高知に住んで感じたことの1つが自転車です。高知は平地が少ないので道幅は群馬・埼玉と比べると狭いのですが、古い道でも歩道と車道との段差があまりなく、あったとしてもなだらかなスロープになっていてガタガタせずに運転できることが多いように感じました。

考えてみると自分が3回も近森病院を勤務先に選んだ最大の魅力は、病院の各部署間の段差が低くて横のつながりがスムーズで、仕事しやすいことでした。今回、部長という敷居の高そうな役職名をいただきましたが、より敷居を低くして皆さんとともに診療に励みたいと思います。

コンパクトカメラの心境で



麻酔科部長 畠中 豊人

最近、デジタル一眼レフカメラで写真を撮るようになった。持つ機器は素晴らしく良くなっても、それに見合う写真を撮ろうという気持ちが強すぎると、その気持ち自体が邪念となって一向にうまくいかない。コンパクトカメラで「あっ、この光きれいだなっ」と、思った瞬間にスナップしたものの方がよほど良かったりする。特に人を相手にする時には被写体とのコミュニケーションが大事で、心が通じないと良い写真は撮れない。そのためにも、かしまらないコンパクトカメラの方が良かったりする。

このたび、麻酔科部長を拝命し身の引き締まる思いではあるが、これまで通り楠目部長と協力し、各科間の橋渡しをして、手術場のマネージメントができれば、と考えている。

「コンパクトカメラの心境」である。

ただいま熟成・売り出し中



外科科長 坪井 香保里

早いもので、高知・近森病院に再び舞い戻ってから一年が過ぎました。あっという間の一年でした。前回(6年前)は大学の人事で一年のみ。今回も大学の人事ではありますが、希望が叶いしばらく近森にいられることとなりました。

まだまだ修行の身ではありますが、年月の経過とともに年齢・経験も少しずつ積み重ね、ただいま熟成・売り出し中。

いつでも声をかけてください。まだまだ青く、科長とは何とも気恥ずかしい限りですが、外科の体制はこれまで同様です。これからもよろしくお願ひいたします。

枯節でとったダシの如く…

医事課長代理 木村 徹

最近、高知新聞の漁の詩に触発されて枯節がマイブームです。枯節とは鰹を生やした種類の鰹節です。

私はコーヒー豆をミルで挽く感覚で削って利用しています。味噌と削りたての枯節を湯飲みに入れお湯を注いで葱を入れただけの味噌汁ですら、鼻腔をくすぐる素晴らしい香りと味にうっとりします。鰹節文化は、日本の食の基本。これからも基本の感動を満喫していきたいと思います。

このたび、医事課長代理という過大な役割にチャレンジする機会をいただきました。診療支援部の一員として枯節でとったダシの如く味のある仕事ができればと考えています。

近森会グループが患者様にさらに支持される組織であり続けることができよう努力する所存です。

多くの情報にアンテナを…

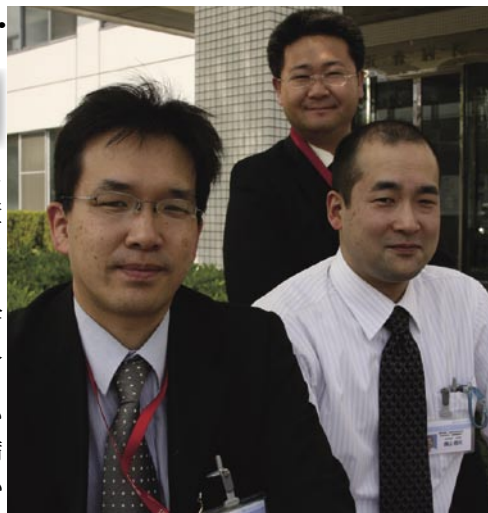
診療情報管理室 室長代理
佐々木 昭典

近森会に入職して11年目に入りました。入職3年目に診療情報管理士の資格を取得させていただき、管理士として現部署に配属後、6年目になります。

この間、管理部の組織改革、DPC(診断群分類別包括評価)、電子カルテ導入など様々なことがありました。

とくにDPCでは調査協力開始当時から業務に携わり、現在でもDPC対象病院として相応しいデータ精度管理を心がけて日々業務に取り組んでおります。

今後は、DPCデータをはじめとして診療現場への診療情報のフィードバックの重要性が益々増してくる感じており、管理士としてこれまで以上にスキルの向上に努め、多くの情報にアンテナを張り、診療情報管理の精度向上に努めていきたいと思っています。



◀後ろに木村さん、前の左が佐々木さんで右が長山さん

タシステムも医事システムを中心として入職当時のスタッフは今では私のみとなってしまいました。これまで、2000年問題を機に汎用機からクライアント・サーバ方式への切替と医師によるオーダリングシステム導入、ハードウェアの更新、電子カルテシステムの導入等を経験させていただきました。何れも大変なイベントでしたが貴重な経験を積むことができました。

今年10月には電子カルテシステムのレスポンスアップを図るべく、サーバのハードウェア更新、及び電子カルテシステムバージョンアップを予定しています。臨床の先生方をはじめ、各部署のスタッフの協力を得ながら企画情報室各スタッフが120%能力を発揮できるように努めたいと思います。

120%で… 企画情報室 室長代理 長山 信夫

早いもので私も入職16年目になります。入職時には医療情報室(現企画情報室)には豊島室長以下、福島さん、武内さん(現武内経理課長)と私の4名が在籍していました。当時は汎用機全盛の時代でコンピュー



◀左から松木師長、寺山総師長、岡村師長

近森リハビリテーション病院 急性期と回復期の窓口

総看護師長 寺山 みのり

当院の総看護師長の最たる役割は、「急性期と回復期の連携の窓口」です。急性期から患者さまのご紹介をいただき、急性期病棟に足を踏み入れるようになり、これまでずっと近森リハ病院の建物の中から窓の外を眺めていたように感じています。とくに急性期の看護師長・主任さんをはじめ、スタッフの皆さんの快いコミュニケーションには感動!もので、看護の素敵さを感じずにはられません。

また、急性期にいらっしゃる患者さまの状態から、当院のスタッフの手でその回復を援助していく様子をイメージし、当院の役割や遣り甲斐を感じられるのも、当院を支えるスタッフの力があればこそ!と頼もしく感じています。「コミュニケーション」、「透明性(

誰にもみえるように)」を目標に自然体でいきたいと思っています。

私なりの病棟環境づくり

2階病棟看護師長 松木 里江

昨年5月に9年のブランクを経て臨床現場に復帰し、11月にリハ病院に異動してきました。病棟師長として東西ユニット60床の担当と、教育担当師長として早速新人研修に携わることとなり、右往左往する毎日です。まさに、「師長業務とは?」からのスタートで、地に足が着いていない状態ですが、患者様がこれからの人生を少しでも自分らしく豊かに過ごすことができるよう、またスタッフ一人ひとりとチームが最大限に力は発揮できるよう、病棟の環境づくりをすることが私の役割かなあと漠然と考えているところです。

患者様と職員の皆さんに教えていただきながら頑張っていきたいと思えます。どうぞよろしく願いいたします。

学んだことを還元する

4階病棟看護師長 岡村 奈保

昨年6月、リハ病院に就職しあという間に過ぎた師長心得の10ヵ月間でした。スタッフに迷惑をかけながら、看護主任にも迷惑をかけながらどたばたと過ごしてきました。とにかく分からないことが多く落ち着かない状態でした。

春からは、看護師長となりました。今までの10ヵ月間は、自分が慣れるのに精いっぱいでしたが、これからは患者さんのことはもちろんスタッフの状況も少しずつ把握していきたいと思えます。リハ病院では、各病棟看護主任が中心になって病棟運営を行っていますが、手助けができるようにがんばりたいと思えます。

また、自分に自信がないことには自信がある私ですが、今年度は色々な勉強をする機会を与えていただいているので、自分のプラスになるだけでなく現場で活かすことができるように、スタッフや患者さんに還元できれば、と思っています。

近森会グループ

| | |
|--------|----------|
| 外来患者数 | 17,354 人 |
| 新入院患者数 | 802 人 |
| 退院患者数 | 808 人 |

近森病院

| | |
|-------------|---------|
| 平均在院日数 | 15.12 日 |
| 地域医療支援病院紹介率 | 86.55 % |
| 救急車搬入件数 | 431 件 |
| うち入院件数 | 225 件 |
| 手術件数 | 374 件 |
| うち手術室実施 | 234 件 |
| うち全身麻酔件数 | 148 件 |

図書室便り (管理棟図書室
3月受入分)

- ・ ATLAS OF VASCULAR SURGERY SECOND EDITION / CHRISTOPHER KZARINS(他著)
- ・ 最新整形外科学大系 9 周術期管理、リスク管理、疼痛管理 / 糸満盛憲(専門編集)
- ・ がん患者の心身医療 / 筒井末春(監修)
- ・ 画像診断のための正常解剖図譜 CT・MRI 等の断層画像を中心に / 前原忠行(編著)
- ・ 21 世紀の消化管がんの内科治療 - 現況での問題点の総括と展望 - / 藤盛孝博(他編集)
- ・ わかりやすい脳脊髄の MR・CT 診断のポイントと症例集 / 宮上光祐
- ・ 画像よりみた脳神経外科的疾患 - その診断過程と治療成績 - / 坪川孝志
- ・ 臨床医のための腹部血管造影・MR / 藤盛孝博(監修)
- ・ これだけは知っておきたいこと Do&Don't - すべきこと、してはならないこと - / ModernPhysician 編集部(編集)
- ・ 自殺予防マニュアル [第2版] 地域医療と担う医師へのうつ状態、うつ病の早期発見と対応の指針 / 西島英利(監修)
- ・ やる気! 攻略本 / 金井壽宏
- ・ 第 38 回日本看護学会論文集 (成人看護) / 日本看護協会(編集)

《寄贈本》

- ・ 続・救急車とリハビリテーション 高知から長崎へ 回復期リハ病棟への熱い想いをかたちに / 栗原正紀
- ・ 臨床看護実践能力育成に関する研究 - 先輩看護師が後輩看護師を育成する力の構成要素とその影響要因 平成 18 年度修士論文 / 松永智香
- ・ 高知アララギ双書 15 歌集 呼びくる声 / 小松もとみ

《別冊・増刊号》

- ・ からだの科学 増刊 これからの管理栄養士 / 吉池信男(他編集)
- ・ 別冊医学のあゆみ アルドステロン研究の新展開 / 飯利太朗(編集)
- ・ 別冊医学のあゆみ 性差医学・性差の背景を探る 遺伝子・ホルモン・環境 / 天野恵子(編集)

編集室通信

▼レイアウトの腕前のせいにはたくはありませんが、また今号も誌面が賑やか過ぎますか? 『ひろっば』を眺めると、元気が出る! とはよく云われてますが・笑 (乙女)